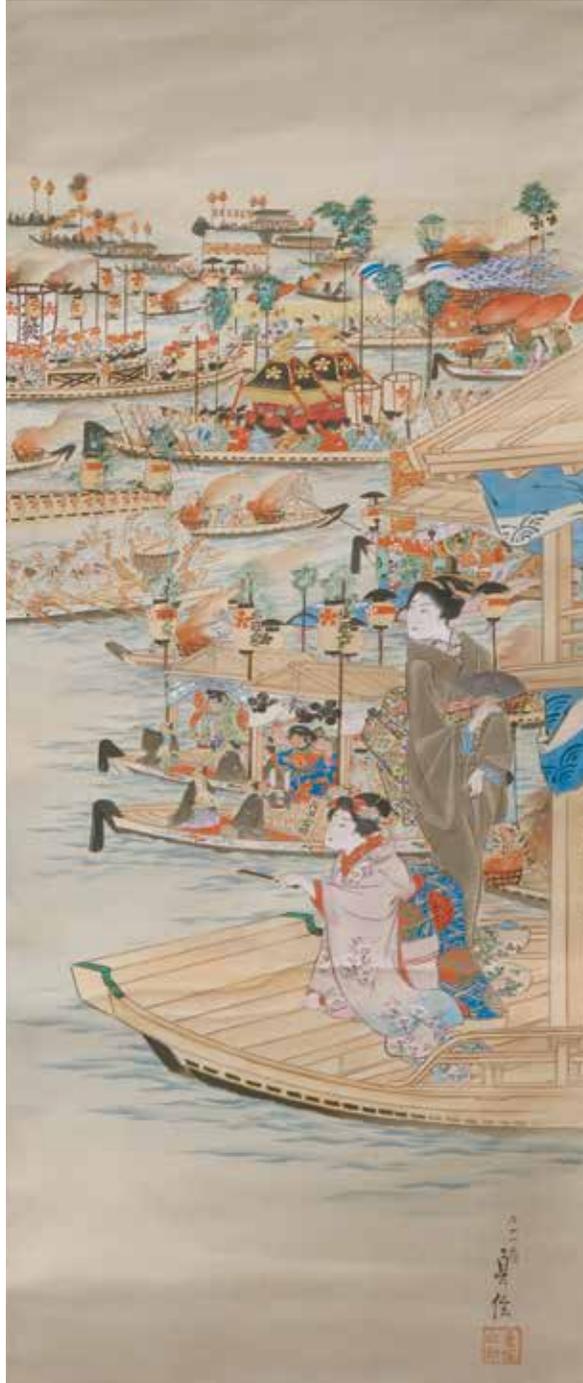


てんまつてんじん

奉祝 今上天皇陛下御在位二十年



涼風進上

平成二十年 盛夏

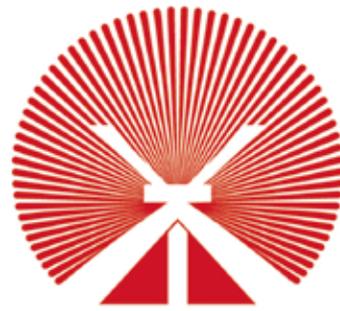


祝祭日には国旗を掲げましょう。

神宮奉賛会北区支部設立……………	2 頁	朝青龍土俵入り……………	8 頁
神銚講の歴史……………	4 頁	境内散歩	
鳳神輿大修理……………	6 頁	表大門前の燈籠……………	10 頁
大学船合同参拝……………	7 頁	「天神祭」のフレーム切手……………	16 頁

遷宮で結ぶ人の輪 心の輪

第六十二回神宮式年遷宮



財団法人 伊勢神宮式年遷宮奉賛会 大阪府本部北支部設立

五月二十八日午後四時から、当宮天満宮会館において神宮奉賛会北支部の設立総会が開催されました。これは来る平成二十五年の伊勢神宮第六十二回式年遷宮に向けてその資財を広く募るために組織された全国的民間組織機関の支部です。

伊勢の神宮は皇祖天照大神をおまつりする我が国でもっとも尊いお宮です。この神宮においても、とりわけ大事なお祭が二十年毎の神宮式年遷宮です。この制度は今から約千三百年前に天武天皇がお定めになり、持統天皇四年（六九〇）に第一回遷宮が行われ、次回は六十二回目となります。

この祭儀は、古来国家の重儀として第五十八回までは国費をもって行われてきましたが、昭和二十八年の第五十九回以降は民間団体である奉賛会の募財協力によることとなり、過去三回行われています。

今回の総予算五百五十億円のうち、神宮の資金で三百三十億円、二百二十億円を広く募ることとなりました。大阪にも本部が設置され、府下に六

十六支部が置かれ、募財目標は九億六千万円ですが、このうち北区では七千万円を目標としています。

この日の設立総会には、役員候補者をはじめ支部世話人の約百名が出席して賑々しく開催されました。開会に先だつて遷宮のビデオを鑑賞し、開会宣言の後には、代表世話人の京極俊明様の挨拶、大阪本部副部長の寺井庁長はじめ来賓の方々の御紹介、来賓代表、寺井庁長の挨拶の後、直ちに議事に入りました。

京極俊明議長のもと、各議案が上程され、支部規約の件、支部役員の内、事業計画の件、収支予算の件が審議され、いずれも満場一致で可決成立しました。ここに目出度く北支部が設立したのです。

総会終了後は席を改めて懇親会に移り、支部長に選任された京極様の御挨拶、神社庁長である寺井副本部長の御礼の言葉があり、前回遷宮時に北支部長を務められ、今回は顧問に御就任されました吉本晴彦様のご発声による乾杯によって開宴となり、一同和やかな歓談のうちにお開きとなりました。今後は一日も早く目標達成となりますよう、ご関係各位には一段のご支援を御願ひ申し上げます。

横田祥瑞先生 書額奉納

四月二十七日 茨木市にお住まいの横田智磨子様から、お母上である横田祥瑞先生の書が奉納され、御本殿にて奉告祭が行われました。

祥瑞先生は、当代一流の女流書家の作品を展示する読売新聞主催の「閨秀書展」(閨秀とは、学芸に秀でた女性の意)などでご活躍されました。このたび奉納された書には、「紅梅

白梅 ちよむすび」と書かれ、平成四年前の作品だということですが(縦六八cm×横八五cm)。細かな正目の幅広な縁が数寄屋造りの茶室を思わせるような額縁の中に、わずかですがやや深めの隙間を設けて画面が納められて、奥行きのある蔭が醸し出されています。

この額は非常にお目出度い内容であり、しかも天神様には縁の深い梅を題材にされていますので、当宮の結婚式場「梅花殿」に飾られて新郎新婦を見守ることとなりました。新しい門出を迎えるお二人を紅梅・白梅に見立てて千代の契りを祈るというまことに結婚式場に相応しい作品といえましょう。

御文庫の曝書

五月二十三日、御文庫講の皆さんの御奉仕により、御文庫の曝書が行われました。

例年は秋に行われる曝書ですが、昨年十月二十六日の予定日は雨模様のため順延となり、このたびの実施となったものです。

午前一〇時に集合された御文庫講の皆さんは、本殿参拝の後、御文庫から梅香学院に蔵書運び出ししました。梅香学院二階では板間と畳の間を明け放ち、若い神職も加わって、総勢三十名ほどで一冊ずつ大切に並べます。晴天にもめぐまれ、多くの蔵書がさわやかな風を受けました。

この曝書は、江戸時代の御文庫講によって始められた習慣で、毎年、初版本の奉納と、曝書の御奉仕が行われていました。その後、明治中期に中断されたのですが、平成一〇年に復活され、今年で十一年目になります。その間、平成一二年には御文庫屋根修理のため、そして昨年の雨模様のため、二度の中止があります。

今回対象となったのは、史書、特に集部が多く、中には三百冊

を超える全集物もあり、何箱にも別けて収納されています。

また、江戸時代末から明治のはじめにかけての歌会に関する資料や、明治三十六年三月一日〜七月三十一日、天王寺今宮で開催された、第五回内国勸業博覧会の出品目録も見られました。日清戦争および日露戦争実録もあり、奉仕の皆さんも手を止めて読みふける姿も見られました。とはいえ、一〇万冊を超えるといわれる膨大な蔵書ですから、今回の対象となったのは、全蔵書の極一部です。これまでも一年ごとに対象とする書棚を決めて実施してきたのですが、ようやく今回で、御文庫二階に収蔵される国書、一階の漢籍の全ての曝書を終えることができました(それでも近代の活字本は対象としていません)。次回から二巡目に入ります。



大阪天満宮献詠 風月社

平成二十年上半期秀歌

飛梅の里帰りかも宰府より
移し植ゑにし紅梅薫る
選者 浅井與四郎

初市のうりてかひても和みあひ
開運達磨手しめに納む
幹事 佐野 秀子

晴着きて母につれられ初市に
たのしみゆきし昔しのばゆ
幹事 森本美也子

菅公を偲ぶ涙か白梅の
光る雫の落つるあけぼの
神戸 鈴木 敬子

天神の御歌すがしき盆梅展
百花繚乱目を瞠目をり
八尾 松村 暁二

降る雪の中に白梅凜として
百花にさきがけ春を誘ふ
東大阪 宝蔵寺京子

疼く身にコタツフと重ねつつ
老にせはしき寒の夜の月
大阪 金行 久夫

制服に埋れ聖火は走り行く
西蔵の旗揺らめく信濃
西宮 牛田眞理子

制服の姿凛々しき女子車掌
新幹線に發車の笛を
大阪 松村龍太郎

袖口に指のぞきある制服の子は
手を振りて皆を笑はす
東大阪 中山 里江

制服のセーラー服におさげ髪
乙女の頃を懐しむ春
大阪 西脇 かつ

新しき制服一つハンガーに
かけてながむる花咲き薫る
京都 塩小路光幸

ランドセル制服姿も凜々しくて
難関校に入學の朝
京都 塩小路淳子

制服の胸に希望を抱きつつ
今青春に燃ゆる若人
大阪 大北 滋保

小學生一日署長の制服は
ややかめしくまた愛らしき
吹田 岩城 富子

はにかみつ嬉しさをくせぬ愛子様
制服姿御披露の寫眞
神戸 太田たか子

鯉のぼりはためく空に新入生
制服まとひて誇らしげなり
東京 小嶺 利子

五條坂直ぐに目に着く制服姿
清水寺へ延々續く
大阪 中瀬 央子

太陽の光やはらに部屋にさし入りて
余寒忘るる至福の時間も
堺 永田 民子

神鉾講の歴史

「鉾流講趣意書」の発見

■ 従来の「昭和五年結成」説
昨年の五月ころ、神鉾講の役員さんから「鉾台の御幣串の金物が無くなったので、御幣を新調しようと思いが」とのご相談がありました。実際見ましたところ、他の部分にも傷みが目立っていたため、部分的な新調では、却って他との調和がくずれてしまう状態でした。

■ 御修理完成 奉告祭
昭和二年までは、鉾流講は日記に登場しますが、神事については記載がなく、渡御列の構成について記録されるのみです。相当形骸化した講になっていたのでしょうか。かくして鉾流講は西天満連合の手によって昭和五年七月二十三日に「復旧再興奉告祭」を執行し、鉾流神事は翌二十四日に再興されたのです。このように、神鉾講はその前身である鉾流講時代を含めると百二十八年の歴史を有する講社ということになります。

社伝によれば、大阪天満宮の創祀は天曆三年（九四九）に村上天皇の勅願によって御創建になり、翌々年の天曆五年には鉾流神事が始まったとされています。文献上の初見は正平年間（一三四六〜七〇）です（昭和五年七月十五日社報）が、この後、寛永末頃には、雑喉場に御旅所が常設されましたので、これに伴い鉾流神事は廃止されました。

その後、昭和五年に至って、実に三百余年ぶりに鉾流神事は復興されたのですが、これまでは、この復興のために神鉾講が結成されたと考えられていました。即ち、鉾流神事の復興・神鉾講の結成・神鉾の製作は、全て昭和五年であると考えられていたのです。しかし、新発見の「鉾流講趣意書」によって、神鉾講は、その前身である「鉾流講」を復旧再興した講であることが判ったのです。

鉾流講の成立と大鉾

船渡御は世情の動乱などによって幾度となく中止を余儀なくされてきましたが、明治維新の動乱もその一つでした。慶応元年には維新の動乱によって渡御が中止され、これ以後、明治十四年に至るまで船渡御は行われませんでした。

やがて世情も沈静化してくると、船渡御の再興が叫ばれるようになり、併せて鉾流神事の再興も話題となっていたようです。しかし、船渡御は再興されたものの、鉾流神事は再興されませんでした。そこで、鉾流神事の故事を伝承するために「大鉾」が登場し渡御に参加するようになりました。

「鉾流講趣意書」によって大鉾製作の経緯を知ることができます。この趣意書によれば、発起者は六十名ですが、その中には、初代の御鳳輦講講元であった上田武蔵氏の名も見えます。当宮の日記からすると、鉾流講は明治二十五年以前の講であることがわかります。おそらくは、この鉾流講こそが船渡御再興の明治十四年ごろに結成された講だろうと推測されるのです。

また昭和五年七月十五日発行の社報には、以下のような記述があります。「明治十五年（四の誤記か）六月に慶応元年来中絶せし船渡御式が再興せらるる際、鉾流神事再興も叫ばれたが大勢遂に俚耳に入らず、鉾流神事神鉾の十二倍せし大鉾を船中へ建てて、船渡御の先鋒として供奉せしが、一兩年にして橋梁掛け替えの為、航行不能となりにかば此の企てすら中絶し、此の大鉾は徒に神庫の一隅に不遇の身をかこちをりしが、今春西天満連合有志の」とあります。この段階ではまだ大鉾の再興があるだけで鉾流神事のことまでは出てこないのです。

鉾流神事の再興

この大鉾を渡御に出すためには鉾台も必要でしたが、昭和五年七月七日になって、当宮社報部の主催で第一回天神祭座談会が開催された席上、食満南北（けまなんぼく）翁が「形ばかりでも鉾流神事を再興しては」との提言を出され、満場一致で承認されました。早速、西天満連合へ通知され、協力を求めたところ、同連合が奉賛して俄に準備が進められることになりました。

鉾台の修理

今回の鉾台の修理計画は、京都の装束司である斎藤専商店に依頼し、平成十九年十一月二十二日に講長・役員・神職が立会のもと、神鉾台は京都に搬出されました。

修復に際して、まずは内部に至るまで細かな調査がなされた後、分解されましたが、その過程で製



作当初から数回にわたって部分修理された形跡がみつけられました。また、事後の修理を想定せずに天然素材でないものも採用されていたことも判明しましたが、今回の修理では、将来の修理も考慮し、なるべく伝統資材で修復することになりました。その内容は、鉾台全体の漆を塗り替え、木部欠損を修復し、金箔部分の取り替え押し直し、金物類の磨き再鍍金、布房類の新調、鉄製台車を木製ケヤキ材で新調、金御幣新調、船用金御幣新調などです。

御修理完成

鉾流歌録音盤完成 奉告祭

七ヶ月余りの工期を経て、鉾台は去る七月四日に当宮に帰ってきました。そして七月十二日には本殿にて盛大な奉告祭が執行されましたが、これにあわせて「鉾流歌録音盤CD」が完成しましたので御本殿では神職楽人によって奉納演奏されました。鉾流歌については、平成十七年「社報」四八号で紹介しましたが、その時点ではまだ保存録音盤の製作には至っていませんでした。そこで、神鉾講では鉾台修理の記念事業として、CD作成を行われることになり、当宮に製作依頼がありました。このたび約半年を費やして二百枚が製作され奉納の運びとなったのです。鉾台御修理と併せまして大鉾様にも御嘉納の御事と拝察申し上げます。



最後に、歴代講元様方の御尊名を記し、

歴代講元
初代 難波 信蔵 昭和 五年
二代 斎藤 周吉 昭和一〇年
三代 藤田弥三郎 昭和十一年
四代 今堀松太郎 昭和十八年
五代 秋田栄之助 昭和四二年
六代 長谷川清治 昭和五〇年
七代 石田 隆 昭和五五年
八代 片岡 秀男 昭和五七年
九代 山口 嘉市 昭和六二年
十代 満仲 春雄 平成 二年
十一代 石之 秀雄 平成一三年
当代 野村 祐三 平成一八年
(欄宜 柳野 等)

天神祭装束賜式 今年御奉仕の方々は

六月二十八日、本年の天神祭齋行に先立ち、神童ほかの所役に推挙されました方々に、御奉仕の御願いを申し上げる「装束賜式」が執行されました。本年御奉仕の方々は、次の六名の皆様です。

- 神童 木村 太祐
 - 猿田彦 波多野 肇
 - 隨身 宮野 裕之
 - 隨身 中林 孝仁
 - 牛曳童児 幸田 和巳
 - 牛曳童女 中桐 彩華
- 天神祭当日の装束と辞令、神札、

掛札、しめ縄が準備された参集殿大広間において、十時、宮司からお一人ずつ辞令を交付して御願いを申し上げます。このあと祭儀係から齋戒についての説明を受けた後、着装して記念撮影を行い、続いて御本殿奉告参拝のため「社参之儀」が行われました。

無事終了後は、関係講社である西天満連合神鉾講、御鳳輦講、福梅講の役員様方をはじめ、御奉仕の皆様が御家族も交えて和やかな「直会」が催されました。
翌二十九日には、直ちに「神童家清祓式」が齋行され、いよいよ今年天神祭が始まりました。

現在では鳳講と玉神輿講の二講が、それぞれに鳳神輿・玉神輿をご奉仕していますが、修造時には、江之子島東之町の町人中によって両神輿が修造され、一講でご奉仕されています。

この年には玉神輿も同時に修理されているのですが、その後も修理は繰り返され、大正一五年（一九二六）五月には、正遷宮に合わせて京都で修理され、さらに昭和一三年（一九三八）にも、京都で修理されました。続く、昭和三五年（一九六〇）七月には、京都の森本鋳金具製作所で、昭和五八年（一九八三）七月にも、京都の森本製作所で、平瓔珞（ようらく）の珠玉や貴金属に糸を通して造った（装具）の金メッキを新調しています。このように、天保十一年以来、五度の修理が行われてきたのですが、今回のような全面的な解体大修理は実に七〇年ぶりとなります。

鳳神輿七〇年ぶりに解体大修理

当宮「鳳神輿」が約七〇年ぶりの解体大修理を終え、去る七月二日に奉還いたしました。

当日午後一時から、参拝の皆様やマスコミの見守るなかで組立を始め、往時の輝きと威風を取り戻した後、御本殿において、鳳講による奉告祭を執り行いました。

● 鳳と玉は一对

天神祭の鳳神輿・玉神輿は、平安

時代中期の正暦五年（九九四）に京都の船岡山で齋行された御霊会の際に、難波の海に流し出された二基の神輿に由来します。

残念ながら、平安時代以来の両神輿の様子については不明なことが多いのですが、現在の鳳神輿・玉神輿については、天保八年（一八三七）の大塩平八郎の乱で焼失した後の天保十一年（一八四〇）に修造されたことが判っています。

● これまでにも五回の修理が

今回の解体によって、明治三十四年（二九〇二）八月に修理が行われた際の、次のような記述が見つかりました。

修理人
元安堂寺町三條橋東入ル
鋳市事
永柄重約



大学船合同参拝

留学生や太鼓の子どもたち

七月五日、天神祭に参加する大学・学校法人の代表等が船渡御の安全祈願のため参拝されました。約百艘の船が航行する船渡御ですが、今年

は大学関係の船が四艘参加します。大阪大学・関西大学・京都産業大学、そして学校法人追手門学院です。これまで大学関係の船が連携することはなかったのですが、このたびは大阪大学の武田副学長の発案で、「学問の神様」のお祭りに「学問の府」として合同でご挨拶させていただきましようとお働きかけて、今回の参拝となったのです。

一〇時から、阪大の武田副学長、関大の一軸校友会長、追手門の中島常務理事らが本殿参拝されました（参加予定だった京産大は都合で不参加）。

その後、本殿前で追手門学院小学校の太鼓クラブの二〇名が和太鼓の演奏を奉納しました。暑い日差しのもと、見学に訪れた保護者や、一般の参拝者が見守るなか、子どもたち

は日ごろの練習の成果を披露しました。

続いて、大阪大学の留学生二五名が、艶やかな民俗衣装で参拝しました。その国籍

は、インド・中国・ベトナム・ネパール・ラオス・トルコ・イラン・タイ・ブラジル・インドネシア・スロベニア・スウェーデン・韓国・スイス・台湾・フィリピンと実に一六カ国に及び、千年余の歴史を誇る天満宮においても初めての出来事でした。



留学生参拝に際しては、代表の五名が、それぞれに母国語で「私は大阪大学の留学生として天神祭に参加させていただきますことを喜んでおります。天神祭が無事に行われること、および日本と私の母国の友好を願います」という趣旨の祭文を奏上しました。

終了後、留学生たちと太鼓の子どもたちは本殿前で記念写真を撮り合

い、天神祭に参加する喜びを分かち合っていました。

なお、この日の午後一時には、天神橋筋商店街で、関西大学によるパレードも行われました。これは、同大の地域連携の一つとして、天神橋筋商店街連合会との共催で行われたもので、同大の交響楽団らによる奉納神賑行事として企画されたものです。

横綱朝青龍土俵入り



大相撲三月場所（大阪場所）を目前に控えた三月四日午後一時、第六十八代横綱朝青龍明徳関が、当宮へ参拝し、土俵入式を奉納されました。実は、朝青龍関の当宮参拝は、今回が二度目になります。当宮寺井宮司の知人に朝青龍関の後援会の方がおられたことから、そのご縁で三年前の平成十七年三月九日に三月場所優勝祈願のために、北の湖理事長とともに参拝されたのです（その様子は当「社報」四十八号をご参照ください）。

この際、宮司との懇談の中に「天面に設えられた仮土俵に横綱が姿を現すと、一目見ようと集まった群衆から大きなよめきと拍手、かけ声が巻き起こりました。露払いに高見盛、太刀持ちに朝赤龍を従え、行司は三十四代立行司木村庄之助でした。土俵正中に進んだ横綱は、豪壮な雲龍型の作法で四股を踏み込むと群衆



面に設えられた仮土俵に横綱が姿を現すと、一目見ようと集まった群衆から大きなよめきと拍手、かけ声が巻き起こりました。露払いに高見盛、太刀持ちに朝赤龍を従え、行司は三十四代立行司木村庄之助でした。土俵正中に進んだ横綱は、豪壮な雲龍型の作法で四股を踏み込むと群衆

衆からは「ヨイシヨイ」のかけ声、マスコミ各社は一斉にフラッシュの嵐を浴びせます。手数入り（ずいり土俵入り）を終えて土俵口に下がったところで、当宮の慣例に従って祈願の御幣が神職から授与され、横綱は御幣を捧げ持って花道を悠々と退下されました。無事奉納を済まされた横綱は衣服をあらためて、報道各社の取材を受けておられました。終止笑顔の応対で、いつになく言葉も多かったとのことでした。



この後、関係者と直会の席に着かれた横綱は、宮司ほか氏子崇敬者の皆様と懇親の輪を広げておられました。本場所所直前のため控えめのお時間で当宮を後にされました。

ちなみに、三年前も、本年も、当宮参拝後に行われた三月場所、朝青龍関は優勝されています。

菅原氏と相撲

朝青龍関の参拝を機会に、当宮と

相撲の関わりを振り返ってみましょう。菅原道真公（天神様）の遠祖にあたる野見宿禰命は、垂仁天皇の皇后の葬儀にあたり、それまでの慣例であった殉死に代えて、埴輪を作らせ「土師臣」（はじのおみ）の姓を与えられたと伝えられますが、「相撲の神」としても知られています。それは、垂仁天皇の御前で、野見

宿禰命が当麻蹴速（たいまのけはや）と対決して勝ったという故事が、相撲の始まりとされていることによります。

その後、菅原道真公（天神様）の曾祖父にあたる土師宿禰古人の時に桓武天皇に願ひ出て、菅原の姓を賜ったのです。

大阪相撲と天満宮

時代は下って江戸時代中期、元禄年間に成立した大阪相撲は、天明三年（一七八三）以来、明治二十八年（一八九五）まで当宮でも数々の勸進相撲興行を行っていました。

昭和二年には、大阪相撲は江戸相撲と合併して大日本相撲協会（のちの（財）日本相撲協会）を設立しますが、一部の力士によって大阪相撲は再開され、昭和八年には「関西角力協会」が設立され、天龍以下三十名の力士が土俵入り式を行っています。また大正の頃から天神祭の陸渡御のしんがりを務めるようになった様子が「天神祭渡御列図」（大正十年、吉川進画）に描かれています。昭和十二年十二月二十二日には当宮で「関西角力協会」解散奉告祭を執行し、大阪相撲の歴史は閉じられました。

横綱 東富士関以来五十九年ぶりの土俵入り

戦後の当宮と相撲の関わりを調べてみますと、横綱東富士関の土俵入り奉納があったことが判りました。昭和二十四年十月二十五日、秋大祭の当日南地「千寿」の奉納によって第四十代横綱の東富士欽志関が土俵入りを奉納しているのです。この時の露払いには神風、太刀持ちは力道山、行司は立行司木村庄之助でした。ちなみに、この東富士関も、朝青龍関と同門で高砂部屋の力士でした。当宮と相撲の深い御神縁を感じるのです。



境内散歩 ②③ 表大門両脇 随神舎前の石燈籠

朝日山四郎右衛門奉納の燈籠

四良右衛門
伴 真鶴

政吉

当宮表門の両脇にある東・西随神舎の前に一対の大きな石燈籠が建っています。飾りの少ないすっきりとした姿のよい燈籠です。

その上の基礎の部分には、

同	播磨屋長兵衛
同	藤三郎
同	彌助
同	卯兵衛
同	與三郎
同	武兵衛
同	作兵衛
同	平七



随神舎前の石燈籠（東側）



随神舎前の石燈籠（西側）

深江屋佐兵衛
同 孝輔
伊勢屋季兵衛
元 野 周

と刻まれています。

朝日山四郎右衛門と伴真鶴については、相撲史料研究会発行の『相撲の史跡5』（昭和六十二年刊）に紹介されていますのでそれを引いておきます。「朝日山は伯耆国二部の生れで、寛政六年（二七九四）七月大坂の上相撲に稲出川政吉で出る。江戸では八年十月三段目（政五郎、政次郎）、十二年四月二段目に昇り真鶴政吉と改名、文化元年（一八〇四）三月入幕し、十四年十月限りで引退した。最高位は江戸で関脇、大坂で大関。文政八年（一八二五）五月大坂の世話人、九

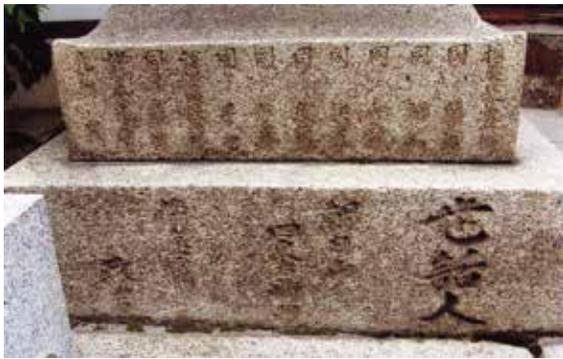
年五月真鶴のまま頭取に昇格、天保四年（一八三三）七月朝日山四郎右衛門を襲名した。十二年七月勸進元を務め、ナンバー1となって弘化二年（一八四五）二月二日没、真翁勇鶴居士。本名仲田政吉。

伴とある真鶴は婿養子で、天保十二年七月大坂の中相撲で、青柳与作から真鶴政吉と改名、十三年七月上相撲に昇った。江戸では十三年十月二段目に付込まれ、二枚目まで進んだが、弘化四年三月限り大坂へ戻り朝日山四郎右衛門を襲名、嘉永元年（一八四八）七月限り引退した。世話人から四年七月頭取となり、安政五年（一八五八）八月四日歿、旭翁義専信士。伯耆国坂村出身。」

朝日山は日本相撲協会の年寄名跡のひとつで、現在の朝日山部屋（東京都江東区）は、江戸時代の大坂相撲の由緒ある頭取名を引き継いでいます。天保十五年、大阪天満宮に石燈籠を建てた朝日山四郎右衛門は、朝日山の四代目、伴の真鶴政吉は五代目に当たるといふことです。このとき何故大阪天満宮へ燈籠を奉納したのか、石燈籠の基礎に刻まれた播磨屋・深江屋・伊勢屋といった人々とは？と次々に疑問がわいてきます。播磨屋長兵衛以下の人々はおそらく大坂

相撲の興行に関わる人々でしょう。

また、前掲書に「天保十五年六月から幕末まで大坂相撲は天満砂原屋敷で興行していることが多いが『近來年代記』の天保十五年に「当年ハ難波新地茶屋町立ならべ候故、天満木幡町ノあき地において興行す」とある。」との記述があり、その頃から天満での相撲興行が多くなったことと関係があるのかもしれない。それよりも、翌年の当宮正遷宮を記念して奉納されたと考える方がよいでしょう。ただ、天保十一年九月、弘化二年五月の日記が失われている、詳しいことがわかりません。



台石に名前が刻まれている

西側の燈籠、弘化三年の火災で焼ける

天保八年（一八三七）二月の大塩焼で当宮は、境内の建物ほとんど焼亡しました。その再建が成り、正遷宮が斎行されたのは、弘化二年四月十三日のことですから、再興に八年の歳月がかかっています。朝日山の燈籠は正遷宮の半年前に奉納されたことになり、当の朝日山四郎右衛門は、正遷宮を見ることなく、弘化二年二月に没しています。ようやく再興なった当宮に再び火災が襲いかかります。正遷宮の翌年、



弘化3年11月の火災のためヒビが入った西側の燈籠

弘化三年十一月三日未明、北新地（きのしのしんち）一丁目の茶屋から出火。西風にあおられて、正午ごろに社内裏門芝居屋根へ飛火して、境内の建物は次々に類焼。焼け残ったのは、御本社（拜殿・幣殿・本殿）と参籠所、神主宅、表門、文庫、神輿庫、など少しだけでした（阪大滋岡家日記・境内焼失図面）。この火災で表門脇東側の随神舎は焼失を免れましたが、西側の随神舎

は焼けました。そのため、西側随神舎の前の燈籠に火がかかり、台石部分（基礎・基壇）にヒビが入っています。西側の燈籠は弘化三年の火災を今に伝えているのです。ただ、このとき御本社が被災を免れ、その後、明治四十二年の北の大火、昭和二十年の大阪大空襲の際も焼失を免れて、無事現在に至っておりますことはありがたいことです。（文化研究所 近江晴子）

市立歴史館いずみさの

記念陳列「古代・中世の泉佐野―街道と交通―」

当宮御文庫蔵本を出品

泉佐野市立歴史館では、平成二十五年五月三十一日から七月十六日まで、『新修泉佐野市史』通史編の発売を記念して、記念陳列「古代・中世の泉佐野―街道と交通―」が開催されました。



大阪天満宮蔵 『古事記』ほか展示

- 一、『古事記』下巻
- 二、『日本書紀』巻一三
- 三、『続日本紀』巻七
- 四、『続日本紀』巻二六
- 五、『日本後記』巻一二
- 六、『丹鶴叢書 草根集』巻一三
- 七、『扶桑拾葉集』巻二（蟻通の神に奉る和歌序）



梅の香薫る二月一〇日から三月九日まで、「てんま天神梅まつり」が開催されました。五年目を迎えた今年も、例年の通り様々な催しが行われ、境内は大勢の参拝客でにぎわっていました。

書院造り百畳敷きの参集殿では、樹齢二〇〇年を超す古木をはじめ、その他各種五〇鉢以上の銘木を展示した「盆梅展」が開かれ、同会場では、当宮所蔵の宝物「天神画像」や、大阪府指定文化財の「御迎人形」、さらには、梅の木を描いた「引札」

第五回 てんま天神梅まつり

このほかにも、境内では様々な体験コーナーが設けられました。挿絵・貼り絵教室では、ハガキサイズの和紙を用い、梅をモチーフにした挿絵や貼り絵作りが行われました。完成したハガキと記念写真を撮る方も見られました。

縫い物教室では梅の模様をあしらった小物作りが体験でき、老若男女が微笑ましく挑戦されていました。本殿の東側の会場では水墨画無料



も合わせて展示されました。会期中ごろには、中庭の梅も満開に。人々は梅の木餅とともに、春の香を楽しんでいました。

夜間イベントとして、狂言や講談、大正琴なども行われ、ライトアップされた庭園と、神楽の舞に人々は魅せられていました。

天満天神えびす祭 『蛭子門の由来』 を建碑



本年一月、復興後二度目の「天満天神えびす祭」を斎行いたしましたところ、昨年にも勝る多くの皆様にお参りいただきました。

九日の遷幸之儀に始まり、宵宮祭、十日のえびす大祭、十一日の報賽祭、遷幸之儀と、神事は滞りなく斎行され、期間中は午前十時から午後十時まで「神札」「福笹」「吉兆」「熊手」など縁起物の授与で境内は賑わいました。

なかでも本年は山本兆揚画伯の揮毫による「御神酒笑姿」の絵馬を謹製し、縁起物として授与させていたなど、新たな話題と賑わいを感じさせる年でした。

さて、本報第五十三号において、「えびす祭」の復興を記念し当宮の戎門（西門）にその由来を記した石碑を建てた事をご紹介しましたが、その写真掲載は間に合わなかったため、ここに改めてご紹介させていただきます。なお「えびす祭」期間中は石碑をライトアップし、戎門よりご参拝になる多くの皆様にご覧いただきました。碑文は次の通りです。

蛭子門の由来

当宮には六つ門がありそれぞれに独自の用途と由来を持っている。当門は、入ってすぐ左手に「戎社」蛭子社」が祀られていたことから「戎門」と呼ばれてきた。

江戸時代の「戎社」では、毎年の正月・五月・九月の十日に「蛭子尊遷殿神事」を斎行しており、この年三回の「十日えびす」には、多くの参拝者」が当門を利用した。

その後「戎社」は、境内西北に移されたが、「戎門」の名は変わらず今に伝えられている。

昨年正月に「十日えびす」を復興したのを記念して、その由来をここに記す。

平成二十年正月吉日
宮司 寺井種伯

奉納 株式会社アップライフ

有限会社アドミ

代表取締役社長 大本 潔

山本兆揚画伯が えびす・大黒の 木像を御奉納

本年の「えびす祭」から授与させていただくことになりました「御神酒笑姿絵馬」の原画は、四天王寺佛絵師の法眼、山本兆揚先生にお描きいただきましたが、この度、兆



揚先生は御所蔵の「恵比寿・大黒」の木像一对を御奉納くださいました。この木像は縦九十cm 横四十cmで、一木造りに彩色が施されていたのですが、今回の御奉納に際して兆揚先生は金箔の残っていたところに新たに金箔を押し、各所の彩色を修復したうえ、「御神酒笑姿」にちなんで恵比寿様のお顔を紅く染められました。

えびす祭の三日間にはたくさんの参拝者がお像を拜見して、恵比須様ながらのニコニコ顔で手を合わせておられました。



体験も行われ、多くの人々が思い通りに絵筆を振るい、水墨画の世界を堪能されました。

会期中には種々の市が立ち並び、

「梅を描いた引札展(Ⅲ)」 開催しました

一昨年、昨年に引き続き、今年も「大盆梅展」開催期間中、参集殿に「梅を描いた引札」三五点を展示し、盆梅拝観にお越しの皆様にご覧いただきました。今年展示しました引札は、紀州五代梅本舗株式会社東農園さんが、昨年一年間で蒐集されたものの中から選ばせていただきました。

引札展も三回目となり、大阪天満宮の「大盆梅展」では、盆梅の背景に梅を描いた引札があるという風景が定着して参りました。



晴れた日には、参集殿南側の緋毛氈の色を写して、障子がピンクに染まる

みなべ 黄梅祭



去る六月十日、和歌山県日高郡みなべ町の(株)東農園にある大阪天満宮御用梅林で梅実の収穫を感謝する「黄梅祭」が斎行されました。

当日早朝、大阪天満宮から、宮司以下、神職、巫女三十名がバスで出向し、現地では早速に祭儀の準備に取りかかり東農園の東善彦社長以下、農園関係者参列のもと神事が奉仕され、修祓にはじまって献饌にはみずみずしい梅実が三方に山盛りなされ、社長の手から祭員に伝供され大前に供えられました、神楽には菅公一千百年大祭記念新

神楽「紅わらべ」が「美しや紅の色なる梅の花あこが顔にもつけたくぞある」と歌われるなか、巫女の袂豊かに舞い奏でられました。祭儀のあとは宮司以下によって梅実の収穫作業が奉仕され少し赤みを帯びた「南高梅」を籠いっぱい収穫しました。この後、祭員は梅の加工工場へ向かい、従業員の皆様と工場設備の清拭を奉仕しました。そして祭儀と収穫を終えた当宮一行は白浜町へ向かい同農園の栽培する香水用バラ園を見学し、白浜温泉にある東農園所有の温泉宿泊施設「海舟」(かいしゅう)へ案内され、直会を頂き、温泉でくつろいだ後、帰路につきました。

この祭儀は平成十六年から五回目となりですが、昨年来、東農園様は藤原紀香さんの結婚式の引き出物に同社製品の梅干し「こころ」が用意されたり、白浜町に温泉ホテルを開業されたり、大阪天満宮の門前に支店が開業されるなど、御社業は大変順調に営まれておられます、社長様は「大阪天満宮さまにお仕えるようになって、ますます繁昌していることに大変感謝しています」と、ご挨拶されましたが、今後ともこの御神縁を大切に、末永い御信心を御願ひ申し上げます。

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

一月課題 其の二「年頭即事」
秋苑 仲原晶子
東風齋暖曙光新 淑氣人心亦絶塵
呵硯題詩親試筆 加梅松竹入佳辰
(訓読)東風暖を齋し 曙光新なり
淑氣人心 亦塵を絶つ 硯を呵し詩を題して試筆に親しむ 梅を加えて松竹 佳辰に入る
(語釈)年頭即事 正月早々の身の回りのこと。齋 持つてくること。淑氣 春の気配。絶塵 埃がないこと。呵 息を強く吹きかけ凍ったものを融かす。佳辰 良い日。曙光 春の光りも新しく感じ、何となしに春の気配が我が心を清らかにする。冷えた切った硯に息をかけ、試しに詩を作った。松竹梅が飾られたお正月である。
二月席題 「書窓梅信」 分韻
得寒 豊穂 米田一男
書窓静坐一身寛 遙想芳馨覺筆端
梅信村園微雪上 南枝數點北枝寒
(訓読)書窓静かに坐せば 一身寛なり 遙に芳馨を想えば 筆端に覺る梅信村園の微雪の上 南枝數點北枝寒し
(語釈)書窓梅信 書齋に梅の花便りが来ること。芳馨 良い香り。
(詩意)書齋の窓辺に静かに坐っていると此の身はゆるやかにくつろいできて、梅のことを思いつていると筆先にも良き香りがしてくるようだ。梅便りは村の公園の微かな雪の上に来たようで、南向きの枝に数点綻び

北向きの枝はさむざむとしている。
三月席題 「寒江垂絲」 分韻
得青 玄齋 佐村昌哉
風勁寒江釣艇停 雪深斜岸似銀屏
投餌臨淵漁叟影 未看魚影只冥冥
(訓読)風勁き寒江釣艇停まり 雪深き斜岸 銀屏に似たり 餌を投じ淵に臨む漁叟の影 未だ魚影を看す只だ冥冥たり
(語釈)寒江垂絲 冬の川に釣りをする。勁 勁つよい。銀屏 銀色の屏風。ここでは雪で、そのように見える。
(詩意)風の強い冬の川に釣り船が泊まっていた、雪におおわれた岸はまるで銀の屏風のようにである。餌をつけ淵に臨む魚を釣る老人、でもまだ釣れていそうにもなく辺りは暗くなっている。
四月課題 「東郊遠望」
微水 上田清文
東郊多逸興 巡拝即佳期
新霽芳霏日 千金好語誰
(訓読)東郊逸興多く巡拝即ち佳期なり 新霽 芳霏の日 千金好し誰にか語らん
(語釈)東郊 町はずれの春の野原。遠望 遠く望むこと。逸興 俗世間を超越した趣。巡拝 神社仏閣を巡り拝むこと。佳期 良い時期。新霽 雨上がりが。芳霏 花が雨の降るよりに散る
(詩意)町はずれの郊外は実に良き趣があり、社寺を巡るにも良い時期である。雨上がりの花が散る日、それは千金にも値すると、そうだ誰かに語らねばならない。

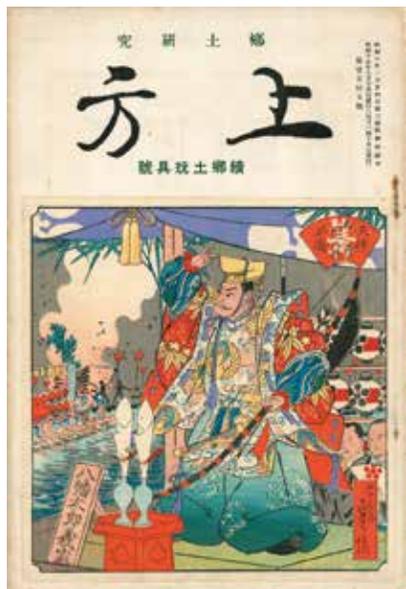
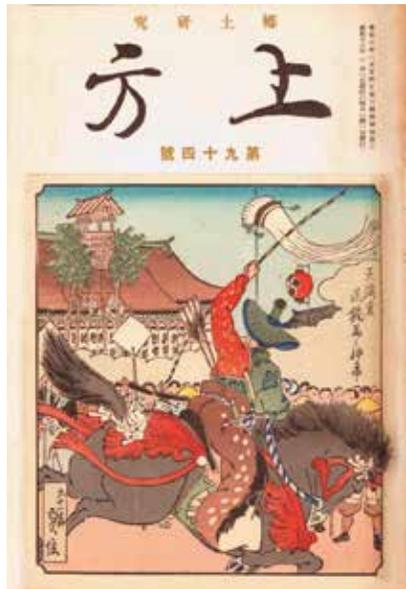
表紙解説

「天神祭船渡御図」

表紙の絵は、今年のお天神祭ボスターやパンフレットの表紙にも使われていますので、ご記憶の方も少なくないと思われます。絵師は二代目の長谷川貞信です。

二代貞信の父は、幕末から明治初年にかけて上方浮世絵の絵師として活躍した初代貞信です。一般に浮世絵師は役者絵を中心に描きますが、初代はじめ歴代の貞信は、新時代の風景を題材とするところに特徴があります。

二代貞信は、嘉永元年(一八四八)に初代の長男に生まれ、父の教えを受けて初代長谷川小信を名乗ると



大阪天満宮所蔵 絹本着色
縦一〇・五cm×横二七・五cm
二代 長谷川貞信筆 昭和十四年

もに、浮世絵師の歌川(中島)芳梅にも入門しています。

明治八年(一八七五)に二代目を襲名し、錦絵新聞の分野で活躍しました。当時の最高の娯楽であった歌舞伎狂言に題材をとった芝居物を多く描くとともに、文明開化の新風俗や当時の世相や事件を題材とし独特の画境を開きます。写真や印刷技術の発達により、浮世絵の需要が減少するに伴い、「立版古」(たてばんこ)厚紙を切り抜き、立体的に組み立てる起し絵)や「引札」(商店のチラシ)なども描き、生涯に二〇〇点も作品を残したといわれています。

人事任免

当宮に関わる画材としては、翌年に御神退一千年祭を控えた明治三四年(一九〇一)の正遷宮を題材に、相撲取りの当宮参拝風景を描いた「天満社正遷宮浪華の賑(にぎわい)」(大判三枚続)があります。

また雑誌「上方」の表紙絵として、九四号(昭和一三年)に「天満宮流鏝馬之神事」を描き、一一五号(昭和五年)には「天神祭お迎人形船図」と題して八幡太郎義家を描いています。二代目は昭和一五年(一九四〇)に亡くなりましたが、その後も貞信の名は代々世襲され、三代・四代を経て、現在も五代が活躍中です。特に五代は、当宮の絵馬にも筆を振るっていただいていますので、お目にされた方も多いのではないのでしょうか。
(文化研究所 高島幸次)



巫女 小寺 理加

平成二十年四月一日付



巫女 柴田 瞳



巫女 杉山 夏紀

《転任》

平成二十年四月一日付

欄宜 水無瀬忠俊(生田神社へ)
出仕 白江 秀宜(北野天満宮へ)

《退職》

平成十九年八月三十一日付

巫女 富田 絵理
平成十九年三月三十一日付
巫女 舞田 亜紀
巫女 峯松 希望

今年も「天神祭」フレーム切手

昨年が続いて、今年も「天神祭」のフレーム切手が制作され、去る六月二十五日から販売されています。昨年の「天神祭」フレーム切手は、陸渡御や船渡御の写真を使って、十枚の切手に仕上げたものですが、

今回は、江戸時代に描かれた天神祭の絵画から選んだものです。歌川貞秀「浪速天満祭（大型錦絵三枚続き）」から地車・佐々木人形・加藤人形、関羽人形、鳳神輿・玉神輿、狸々人形の五場面を選び、さらに歌川広重

「難波橋天神祭の図」（諸国名所百景の内）、晁鐘成「天神祭十二時」、作者不詳「古写天神祭渡御船之図」、葛飾北斎「撰州天満橋」（諸国名橋奇覧の内）、歌川国貞「天神祭夕景」（浪花百景の内）の五点を加えた計六十二場面です。各場の詳しい解説書もついて、一二〇〇円で市内の郵便局で販売されています。



○ 切手と写真部分も郵便物に貼って、ご利用いただけます。
 写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
 ○ 郵便料を納付するためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。

編集後記

本「社報」は年二回の発行ですが、毎年七月に発行する号では、必然的に、一月〜三月の「えびす祭」「梅まつり」のご報告と、七月の「天神祭」の予告記事が中心になってしまいました。

年中行事の継承を大切にしている神社とはいえ、マンネリの誌面構成にならないように編集しています。工夫の跡を感じていただけてますでしょうか。

先日の編集会議では、神社と氏子さん達の交流についても、もっと採り上げましょう、という声があがりました。今回は果たせませんでした。徐々に、若い職員の視点が生かされることと思います。

大阪天満宮社報
 てんまてんじん 第54号

平成20年7月20日印刷
 平成20年7月25日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18

TEL 06-63353-0025

印刷所 木村印刷株式会社